



ちょっとこぼれ話 XLI

濱口 恵子

ディオニューソスの続きです。

ディオニューソスが、ある浜辺に立っていた時のことです。近海を荒らしまわっていたチュルセーノイ人の海賊達が、たまたまその浜辺近くを通りかかりました。いかにも高貴そうな衣装を身に着けたディオニューソスを見て、海賊達は、互いに目配せをします。静かに小舟を出して浜に着け、こっそりディオニューソスに忍び寄って襲い掛かり、力づくで船まで連れて行きました。身なりの良さから考えて、どこかの王か、大地主の息子に違いないと考え、莫大な身代金をせしめるか、奴隷として売り飛ばそうという魂胆です。海賊達は、ディオニューソスを縛り上げようとはしますが、何回縛っても、縄は自然にほどけてしまいます。ディオニューソスは、うっすらと笑みを浮かべているだけです。このただならぬ様子を見ていた舵取りが、にわかに叫びます。

「やめないか。気でも狂ったのか。このお方は、きっと何かの神様に違いない。たたりでもあったら大変だ。さあ、岸にお帰ししよう」

しかし、他の海賊達は頑として聞き入れません。船を沖に向かって進めようとした時です。突然、船の中におどろ酒の匂いが漂ってきて、見ると甲板の上をおどろ酒が流れているではありませんか。さらに、船の至る所からおどろの蔓が伸びてきて、船がおどろの木で埋め尽くされてしまいました。さすがの海賊達も、驚きと恐怖で顔が引きつっています。その時、先ほどまで笑っていたディオニューソスの顔が恐ろし

い形相になり、獅子の姿に身を変じたのです。獅子は、今にも海賊の首領を目がけて飛びかかろうとしています。海賊達は、船の舳先で身を寄せ合って震えていましたが、首領が押し倒されるや否や、先を争って海に飛び込みました。海に目をやると、もはやそこには人間の姿はなく、たくさんの海豚が飛び跳ねているだけでした。海賊達は、哀れにも海豚に変えられてしまいました。ただ一人、ディオニューソスをかばった舵取りだけは、許されて、人間の姿に留めておられました。

各地を放浪したディオニューソスは、アテーナイ地方のイーカリアという村で、イーカリオスという名の男に出会い、手厚くもてなされます。その真心に感銘を受けたディオニューソスは、イーカリオスにおどろの木を授け、栽培方法と酒を醸す方法を伝授します。できたおどろ酒を飲んでみると、得も言われぬ心地よさです。イーカリオスは、この素晴らしい飲み物を自分一人で味わうのはもったいないと思い、村の人々に分け与えました。村人達は、おどろ酒を水で薄めずに飲んだため、急に酔いが回ってフラフラになり、何か恐ろしい毒を盛られたのではないかと疑いました。怒りは、イーカリオスに向けられます。恩知らずな村人達は、イーカリオスを惨殺し、1本の木の根元に埋めてしまいました。すると、不思議なことに、そこからおどろの蔓が生えてきました。

イーカリオスの娘エーリゴネーは、酒の袋を持って家を出たまま帰らない父親を探して、方々を訪ね歩きます。長い放浪の末、乞食のような姿になって、やっと父親が埋められたと思

われる、ぶどうの蔓が絡まった木の元に辿り着きます。そして、思ってもみない悲しい結末を知ることとなりました。父親の死を嘆き悲しんだエーリゴネーは、世を儚み、その木に縄をかけ、首をつって果えました。

恩知らずな村人達に、ディオニューソスの怒りの矛先は向けられます。飢饉が村を襲い、悪い病気が流行します。狂って木で首をつる娘達が、後を絶ちません。とうとう、思い余って村人達は、神に伺いを立てました。下された神託は、屍を祀り、贖罪をして清めよとのことでした。村人達は、深く後悔して、イーカリオスと娘のエーリゴネーを手厚く抱きました。ディオニューソスの怒りはやっと鎮まり、後に、この地方は、ぶどうの産地として有名になります。

余談ですが、ギリシア・ローマ時代は、ぶどう酒を水で薄めて飲むのが常だったようです。

他に、ディオニューソスにまつわる物語で有名なものは、何と言ってもアリアドネーとの恋でしょう。ミーノータウロス退治でテーセウスを助けたにもかかわらず、ナクソス島に寄った時、寝過ごして船の出航に間に合わず、置いて行かれたアリアドネーを、ディオニューソスが攫って行って花嫁にしたというエピソードは、16回でお話ししました。

もう1つ有名な物語は、触る物がすべて金になるミダース王のエピソードです。触る物すべてを金にして欲しいというミダース王の望みを叶えたのが、ディオニューソスでした。これは、29回でお話しています。

熱狂的な信者を獲得しながら、ギリシア各地を放浪し、ついにディオニューソスは、神としての地位を不動のものとしします。今や、気になるのは、母のことです。ディオニューソスは、冥府に赴き、母セメレーを救い出して、天上に迎え入れました。セメレーは、神となり、以後テューオーネーと呼ばれるようになりました。

ディオニューソスは、お酒、ぶどうの栽培、演劇の神です。古代では、各地でディオニューソスを祀る祭儀が、盛大に行われました。祭典

では、合唱競技や悲劇・喜劇等の演劇の競演が行われました。ギリシア悲劇・喜劇の発達は、ディオニューソス信仰と切っても切れない関係があったと言っても過言ではありません。有名な祭典を挙げますと、イオニアの各地で開かれた、2月のアンテステーリア祭（花の祭）があります。アテーナイでは、3日間に亘って催されました。最も盛大な祭典は、大ディオニューシア祭です。アテーナイのアクロポリスの東南麓にあるディオニューソス・エレウテレウスの社の祭で、3月末、5日間に亘って盛大に行われました。アクロポリス南崖にあるディオニューソス大円形劇場では、悲劇や喜劇の競演が催され、各地から多くの観客を集めました。

ディオニューソスの随伴者としては、サテュロスやシーレーノスが挙げられます。サテュロスは、山羊の角や耳、脚を持った野蛮な山の精で、時としてシーレーノスと混同されます。シーレーノスが老人の姿で描かれるのに対し、サテュロスは、若い青年の姿で現されます。お酒を好み、悪戯や悪ふざけをしてニンフをからかうのが得意です。シーレーノスについては、ミダース王のところでご説明しました。

さて、ディオニューソス神は、美術作品にも数多く登場します。ディオニューソスは、古代初期のギリシア美術においては、長い衣装を纏い、髭を蓄えた中年、もしくは初老の男性として描かれていました。紀元前6世紀から5世紀初めの黒絵や赤絵の壺などに、髭を生やした中年のディオニューソス像が多く見受けられますが、紀元前5世紀中頃から、髭のない、裸の若者の姿で描かれるようになりました。後代の作品ですが、有名なものに、ミケランジェロ作の彫刻「バックス像」（1496年頃）、ティツィアーノ作の「バックスとアリアドネ」（1520年頃）、ベラスケス作の絵画「バックスの勝利」（1628年）などがあります。

夜のくつろぎのひと時、ワイン片手に、星空を見ながら、ワインの神様であるディオニューソスに思いを馳せてみました。